

慟哭の海

樺太引き揚げ三船遭難の記録

北海道新聞社編

道新選書



★——道新選書 10

慟哭の海

1988年 8 月10日 発行

定価 980円

編 者 北海道新聞社

発行者 北 洞 孝 雄

発行所 北海道新聞社

札幌市中央区大通西3丁目6

電話(代表)011-221-2111

振替・小樽9-28398

印刷所 三陽印刷株式会社

製本所 有限会社石田製本



落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN 4-89363-929-3 C 0321 ￥ 980 E

海 の 哭 働

—樺太引き揚げ三船遭難の記録—

北海道新聞社 編



道新選書

10

留萌沖に逝ける人々に捧げる

慟哭の海——樺太引き揚げ三船遭難の記録

◆目次

はじめに 7

第一章 大泊港 15

1 8月15日 16

2 緊急疎開 23

3 引き揚げ船 31

4 宗谷海峡 40

第二章 小笠原丸 49

1 稚内港 50

2 航海灯 58

3 未明の雷撃 64

4 別荘の浜 73

第三章 第二新興丸 83

1 二番船倉 84

2 暁の交戦 93

3 SOS 101

4	留萌港	108
---	-----	-----

第四章

泰東丸

..... 117

1	鬼鹿沖	118
---	-----	-----

2	朝の惨劇	125
---	------	-----

3	漂流	132
---	----	-----

4	海鳴り	140
---	-----	-----

第五章

留萌沖

..... 147

1	国籍不明艦	148
---	-------	-----

2	海の墓場	156
---	------	-----

3	歳月の旅路	164
---	-------	-----

4	海底伝説	172
---	------	-----

終章

千望台

..... 183

樺太関係年表（昭和二十年）	193
---------------	-----

あとがき	207
------	-----

はじめに

その文書の山は二個の段ボール箱に積みられたまま、留萌警察署の倉庫の片隅で埃にまみれて眠っていた。

署長の好意で、会議室の一角を借りて、その文書に初めて目を通したのは昭和五十年の早春、署の庭先ではエゾムラサキツツジが満開の花を咲かせていた。

戦争の終わった夏、昭和二十年八月二十二日、樺太（サハリン）から小樽に向かっていた小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の三隻の引き揚げ船が、国籍不明の潜水艦の攻撃を次々と受けて沈没や大破し、推定千七百八人の乗員、引揚者が留萌沖の海底に消えた。

戦いが終わってから一週間もたつてから、なぜこれほど多くの人たちが理由もなく殺されなければならなかったのか。しかも、犠牲者のほとんどは戦火を逃れて祖国に引き揚げる途中の年寄り、女、年端もいかぬ子供たちだった。

戦後の混乱に紛れて、残された遺族や、関係者以外からは忘れ去られたまま、歴史の闇のなかに閉じ込められていた悲劇の全容を明らかにしようと、私たち月刊「ダン」（現「道新Today」）の取材チームが、関係者の足跡や、証言を求めて取材活動を始めた時は、すでに事件から三十年の歳月

が経っていた。

手掛かりは当初、留萌市社会福祉協議会が保存していた一冊の名簿だった。それは毎年夏になると、この悲劇の海を見下ろす留萌市千望台に建てられた「樺太引揚三船殉難者慰霊之碑」の前で開かれていた慰霊祭に参加していた遺族や関係者の名簿だった。しかし、そこには百人足らずの名前が記されているに過ぎなかった。

私たちはこの名簿をもとに全国に散らばる関係者に事件についてのアンケートを求める手紙を出した。三十年という歳月はすべての記憶を風化させているのではないかとこの懸念もあった。しかし、結果は予想外だった。私たちの手元にはアンケートを求めた全員から回答が寄せられた。回答が得られなかったのは「宛先人不明」で戻ってきたものだけだった。

回答のなかには、戦後樺太から引き揚げて来て、先に帰っているはずの妻子が行方不明になっている事を初めて知った、というのも少なくなかった。

当時、豊原逋信局に勤めていて小笠原丸で妻子六人を失った名古屋市の寺沢泰さんは「私の命のあるかぎり、この悲しい思い出は消えることはありません。不幸な妻子のために新聞社の手でこの惨事の真相を明らかにしてもらえるのなら、必要な費用を負担する用意があります」とまで、書き添えてきた。

第二新興丸で夫と息子を失い、弘前市でひとり暮らしをしていた工藤キヨさんは「このことだれかにうったいたいと思って居ますが、私は学がありませんのでくわしく書けないのがざんねんではありません。思った半分もかけないので、くやしいやら、はずかしいやらで、やっとかくことにきめま

した」とたどたどしい鉛筆書きで便箋十四枚にびっしりと遭難記録を書き綴ってくれた。

泰東丸に乗り組んで九死に一生を得た北九州市の西山栄一さんへの便りには、妻の常子さんからこんな返事が返ってきた。「主人はいま、チンタゴン出港、十日頃シンガポール着と申しておりますので、横浜着は六月二十日頃と存じます」と不在を詫びたあと「当時十九歳で甲板員だったといっております。公休の折りには、必ず一度は泰東丸の苦しかった思い出と女子や、子供の『助けて』の泣き声がいまだに耳に残っていると話しております」と書き添えてあった。

三十年の歳月は事件を風化させるところか、生き残った人たちの心に化石のように重くのしかかっていることが、これらの手紙からは読み取れた。私たちはこれらの回答をもとに逢うことができた人からは直接話を聞き、取材の網をぐんぐんと広げていった。

二か月余の取材期間に「証言」を得た人は、延べ二百人を超え、取材範囲も、東京、名古屋から航行中の洋上のタンカーまで及んだ。しかし三十年という歳月は多くの関係者を故人にし、行方をつかめない人も増やしていた。

こうして集められた証言や資料をもとに私たちは事実を追い求めた。それはすべてが事実のように思われたが、混乱のなかでの思い違いや、時の流れのなかで記憶が変わったと思われるつじつまの合わない話も多かった。

留萌署に残された文書の束は、事件当時、かろうじて救助され、留萌や、増毛の浜にたどりついた三船の乗組員や、引き揚げ者たちが残していた調書や関係文書の綴りであった。薄いザラ半紙に毛筆やペンで書き込まれた文書の文字は、墨の色もあせ、なかには判読の困難なものもあったが、

これだけが事件の真相に近づく大きな手掛かりでもあった。

なかでも私たちの胸を打ったのは、分厚い遭難者の検死名簿であった。そこには「氏名不詳、女児、頭蓋骨露出、推定三歳、着衣……」「氏名不詳、嬰兒、性別不詳、着衣……」という具合に、何ページにもわたって海上や浜辺で収容された遺体の特徴が書き込まれていた。遺体の身元が判明し、肉親に引き取られたものの「受領証」も綴り込まれていた。その一通を紹介する。

一、屍体壹個（山口クニ子）

毛糸パンテ一枚（桃色）

一、着衣 人絹服一枚

毛糸袖ナシ

右正ニ受領候也

昭和二十年八月二十五日

増毛町増毛病院 入院中 山口ユキ

取材を進めるうちに、この女性は六歳の長男英樹、三歳の長女久美子の二人を連れて小笠原丸で引き揚げ中に難に遭った宮城県出身の山口幸子さんと分かった。係員が名前と受け取りを代筆したのか、久美子が「クニ子」、幸子が「ユキ」となっているが、幸子さんにとって、そんなことはもうどうでもよかったのか。訂正したあとがない。（77ページ参照）

事故当時、幸子さんは臨月の身重だった。冷たい海中から引き上げられ、増毛町立病院に収容された幸子さんはその後、奇跡的に回復し一週間後病院を退院し、男児を出産した。場所は町民の好意で世話になった町内の芸者置屋の一室だったという。

「いや、男の子ではなくて産んだのは女の子のはずだ。その子は成人して千葉の方で郵便局に勤めていた」という逆の証言もあった。幸子さんの夫は樺太で通信関係の仕事をしていた。郵便局勤務はあり得ない話ではないと思われたが、それだけでは確認のしようがなかった。

事件当日、遭難者を迎え入れたのは増毛町だけではなく隣りの留萌市では、かろうじて留萌港に逃げ込んだ第二新興丸から三千人近い避難者が上陸している。そのなかには幸子さんと同じように子供を失い、混乱のなかで出産した妊婦もいたのかも知れない。それらの話があるいは重なりあったことも考えられた。

私たち取材チームは書類の山、関係者の証言から、こうした事実をひとつずつ掘り起こしていった。こうしてまとめられたのが月刊「ダン」昭和五十年八月号に

「慟哭の海―樺太引き揚げ三船の悲劇 留萌沖に消えた千七百人」と題して掲載された特集記事である。この本では、この特集記事をもとに、雑誌では収容し切れなかった関係者の手記や、証言、その後の動きなどを加えて新たに書き下ろした。そのさい雑誌では紹介したが、その後の調査で明らかに事実と反すると思われる証言はカットした。

戦後四十三年、三船遭難の悲劇はまだ終わりを告げていない。最後まで所在が不明だった泰東丸の捜索は、夏になると毎年のように繰り返されてきたが、五十八年に泰東丸と思われる船体を発見、

部品の一部を回収したが、遺骨は一片も発見されぬままに搜索は打ち切りとなった。

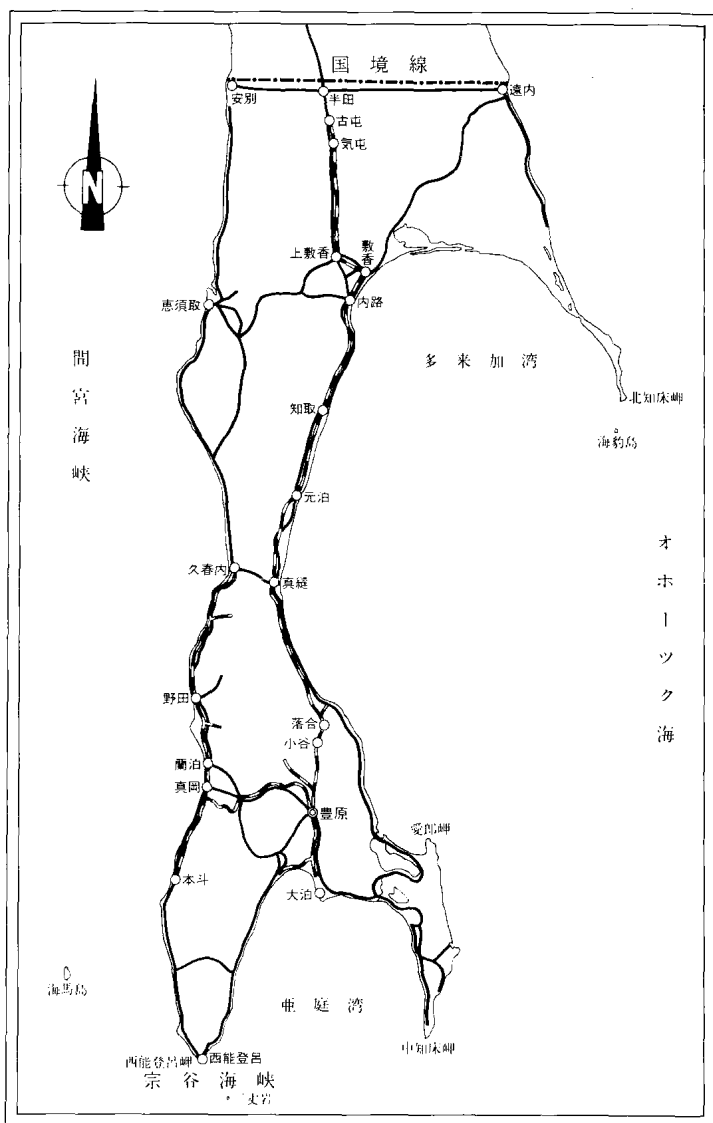
戦争はすでに一週間前に終わっていた。それなのに三船はなぜ攻撃されたのだろうか——浮上した潜水艦からは、甲板にいる黒山のような引き揚げ者の姿ははつきり見えたはずである。しかもそのほとんどは老人、女、子供たちである。

泰東丸は機関を止め、白旗を掲げて無抵抗の意志を示した。砲火はその上に浴びせられたのである。第二新興丸でも、小笠原丸でも、潜水艦の機銃掃射は、海中にこぼれ落ちた漂流者の上にまで及んでいる。

そこには乗船者は一人も生かしておかないという「ジェノサイドの思想」さえ感じられる。同じようなジェノサイドとして、日本国民は大戦末期、広島、長崎で原爆の洗礼を受けた。原爆については、落とした側にも、落とされた側にも「人類永遠の傷跡」として、記憶され、語り継がれてきた。

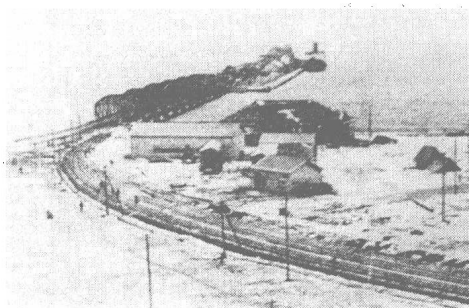
だが非道とより言いようない小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の三船の遭難については、単に「国籍不明潜水艦による攻撃」として今日まで放置されてきたのはなぜだろうか。三船遭難の取材は、この疑問からスタートした。そのナゾはいまも解き明かされていない。私たちはこの物語を「あの日」を体験した日本人なら忘れることのできない八月十五日から始めたい。

（本文中の敬称は省略しました。年齢、肩書きは特に断わりのない限り、事件当時のものです。）



南樺太全図（昭和20年当時）

第一章 大泊港



大泊港の岸壁